

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 丸山由紀
学位 博士(教育学)
学位記番号 新大院博(教)第18号
学位授与の日付 平成28年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 児童生徒の体型認識と生活習慣との関係に関するチェックリストの作成—行動変容を促す教育プログラムの構築に向けて—

論文審査委員 主査 篠田 邦彦 教授
副査 山崎 健 教授
副査 松井 賢二 教授

博士論文の要旨

諸言

近年、やせ願望を抱く者の低年齢化が進み、減量行動や摂食障害が思春期前後から発症する「思春期やせ症(小児期発症神経性食欲不振症)」に関心が高まっており、成長に伴う正常な体重増加がみられず、今後思春期やせ症の発症が懸念される“思春期やせ症予備群”や思春期やせ症の“前兆”と考えられている「不健康やせ」は年々増加傾向であることが報告されている。そればかりでなく、「不健康やせ」は特に、女子児童生徒の間の強い「やせ願望」とともに低年齢化していると指摘されていることから、早期の適切な対応が求められる。そこで本研究は「不健康やせ」に関するこれまでの先行研究の成果から得られる現状を踏まえ、児童生徒が「不健康やせ」に陥り健康を損なう前にその兆候を検知するスクリーニングを行う上で有用な因子は何かを探り、健康の保持増進を図るうえで適切な自身の体型評価の指導につながるチェックリスト作成を試みることを目的とした。

第1章 不健康やせに関する系統的レビュー

児童生徒における不健康やせの実態を把握し、早期発見・早期指導につながるスクリーニング方法や指導方法の開発に有用な要因はなにか検討した。

1948年～2015年7月に国内で発表された不健康やせに関する文献を抽出し、エビデンスレベル、推奨の強さによって分類した。さらに文献を内容別にカテゴリー分けをし、不健康やせの「実態」、「特徴」、「スクリーニング方法」、「要因」、「予防・指導の取り組み」、やせ傾向児の「ダイエットの実態」について検討した。

不健康やせを引き起こす要因は食習慣の乱れの他に、睡眠習慣の乱れや友人関係、セルフエフィカシーなど様々な要素が階層構造的に相互に関連していることが示唆された。不健康やせの一時的予防にはポピュレーションアプローチにより、生活習慣全般の指導を行うことが有用である可能性が示唆された。また、不健康やせの基準は統一されていないことが明らかとなり、不健康やせの頻度の調査

で用いられている基準(肥満度-15%以下)と学校健診でやせの判定に用いられている基準(肥満度-20%以下)のいずれが妥当かを検討する必要があることが示唆された。

第2章 体型に関する認識

小、中、高校生の客観的体型と主観的体型の一致度を評価し、一致度と生活習慣項目との間の関係を明らかにすることを目的とした。

平成17年度～平成25年度に新潟県で実施した生活実態調査を用いた。算出した肥満度により客観的体型を点数化するとともに、体型についての自己評価を主観的体型として点数化を図った。客観的体型の点数から主観的体型の点数を減じた数値を「ずれ度」として評価を行った。さらに「ずれ度」と体型願望について、やせ群、高度やせ群に判定された者を両者の条件に沿って「一致群」、「要観察群」、「要注意群」、「要指導群」として検討した。

客観的体型よりも自身を過大に評価する者が特に女子に多く存在し、その割合は学年がより高い者の間でより高い値を示した。男女ともに小学校3年生段階では「ずれ度±0」の者の割合が最も高かったが、学年がより高い者の間でずれを生じる者の割合がより高かった。また学年がより高い者の間で、「ずれ度」自体が大きい者の割合が高い可能性が示唆された。要観察群、要注意群、要指導群の出現率は女子に高く、学年が高い者の間で出現率がより高い傾向が示された。一致群、要観察群、要注意群、要指導群の生活習慣は、一致群が他群に比べ運動、食事、睡眠において望ましい習慣に取り組んでいる傾向が示された。しかし要観察群、要注意群、要指導群が小学校3年生で出現していることから、自身を誤って認識し、誤った理想体型を望むものの低年齢化が示唆された。

第3章 不健康やせの兆候となる要因の検討—肥満度を用いて判定した「やせ」の程度と生活習慣との関係—

不健康やせの兆候のある者を抽出する要因は何かを検討した。

肥満度-15%以下のやせ予備群は、男子は小学校6年生、女子は小学校5年生で出現数が最も多かった。肥満度と生活習慣の関係では、小学生男子、中学生男子では肥満度のみの分類では生活習慣に特徴はみられず、+ (プラス) の「ずれ度」の有無により生活習慣の傾向が異なることが示された。高校生男女においては肥満度が-15%以下に判定された者は「ずれ度」の有無に関わらず生活習慣が望ましくない傾向が示された。このように、学校段階や性別によって体型や「ずれ度」と望ましくない生活習慣の関係は異なることが示された。

不健康やせの兆候のある者は、客観的体型と主観的体型の「ずれ度」に加えて生活習慣項目を組み合わせることで抽出が可能となることが示唆された。その際に関連する生活習慣項目は男女で異なることが示唆された。

第4章 不健康やせの第一次予防スクリーニングの指標の検討

不健康やせの第一次予防スクリーニングの指標について検討した。

「肥満度-15%以下のやせ体型」かつ「ずれ度が+2以上」である者は、不健康やせと評価される者に該当し、やせ願望を抱く可能性が高く、また望ましくない生活習慣を形成している可能性が考えられた。「肥満度-15%以下」、かつ、「ずれ度+2」の者を指導の対象として注意

深く観察し、必要に応じて指導を行っていくことが今後不健康やせ児をつくらないための一つの手立てになると期待できる。しかし研究の限界として、「肥満度-15%以下」の基準に加え、「ずれ度+2以上」に該当した者の中に、不健康やせの者がどれほど存在するか検証することはできなかった。今後この「ずれ度」が不健康やせの有用な指標となりうるか、不健康やせ児を抽出できる感度と特異度についてさらに検討をする必要がある。

審査結果の要旨

丸山氏は第1章で「不健康やせ」に関する先行研究を系統的レビューの手法を用いて丹念に精査し、「不健康やせ」を引き起こす要因は食習慣の乱れの他に、睡眠習慣の乱れや友人関係、セルフエフィカシーなど様々な要素が階層構造的に相互に関連しており、「不健康やせ」の一時的予防にはポピュレーションアプローチにより、生活習慣全般の指導を行うことが有用である可能性があることが示唆されていることを明らかにした。また、「不健康やせ」の基準は統一されておらず、「不健康やせ」判定の基準は現在、肥満度-15%以下と肥満度-20%以下の二つが用いられているが、「不健康やせ」に至らないよう予防策を講じるためにはいずれの基準が妥当かを検討する必要があることを明らかにした。

これら最新の研究成果を系統的に集積・整理し、「不健康やせ」に関する研究の動向と方向性、未解決の問題点を明確に示したことは、児童生徒の健康教育研究に重要な知見をもたらしたことを意味し、高く評価される。

第2章では児童生徒のやせ願望に関係すると思われる小、中、高校生の客観的体型と主観的体型との関係に着目し、両者の一致度と生活習慣項目との間の関係を分析・検討した。その際に両者の間の齟齬を点数化して「ずれ度」と名付けて一致度を評価する方法を新たに考案した。さらに「ずれ度」と体型願望について、やせ群、高度やせ群に判定された者を両者の条件に沿って「一致群」、「要観察群」、「要注意群」、「要指導群」として検討をすすめ、客観的体型よりも自身を過大に評価する者が特に女子に多く存在し、その割合は学年がより高い者の間でより高い値を示すことを明らかにした。また、学年がより高い者の間で、「ずれ度」自体が大きい者の割合が高い可能性があることを明らかにし、要観察群、要注意群、要指導群の出現率は女子に高く、学年が高い者の間で出現率がより高い傾向があることを明らかにした。さらに、一致群、要観察群、要注意群、要指導群の生活習慣は、一致群が他群に比べ運動、食事、睡眠において望ましい習慣に取り組んでいる傾向があるが、要観察群、要注意群、要指導群が小学校3年生で出現していることから、自身を誤って認識し、誤った理想体型を望むものの低年齢化していることを明らかにした。

やせ願望が「不健康やせ」に至る際の徴候を、その実態を示しながら新たな評価方法を考案すると共に、段階的な判定基準まで提案し、その有用性を裏付ける知見を示したことは健康教育に画期的かつ実践的な手法とこれまで知られていなかった貴重な資料を提供したことはすぐれた独創性と実効性が認められ、高く評価される。

第 3 章では「不健康やせ」の兆候のある者を抽出する要因は何かを検討し、学校段階や性別によって体型や「ずれ度」と望ましくない生活習慣の関係は異なることが示しながら、不健康やせの兆候のある者は、客観的体型と主観的体型の「ずれ度」に加えて生活習慣項目を組み合わせることで抽出が可能となること明らかにした。

潜在的な「不健康やせ」の可能性のあるものを抽出する要因を示した研究はほとんど見当たらず、関連する要因に生活習慣に焦点を当て、その中から強い関連性を持つものを導き出したこと、さらに自ら考案した「ずれ度」と組み合わせることでより確かな抽出要因として機能することを示したことは新規性と独創性、さらに有用性の高い研究として高く評価される。

第 4 章では、「不健康やせ」の第一次予防スクリーニングの指標について検討し、「肥満度 -15% 以下のやせ体型」かつ「ずれ度が +2 以上」である者は、不健康やせと評価される者に該当し、やせ願望を抱く可能性が高く、また望ましくない生活習慣を形成している可能性が考えられた。

潜在的に「不健康やせ」の徴候のあるものを抽出する簡便なスクリーニング方法を新たに提案したことは、健康教育に有用な知見と方法をもたらした優れた研究として評価される。

以上のことから、丸山氏は児童生徒の「不健康やせ」の現状をあぶり出して第一次予防につなげる方法を新たな視点から作り出し、健康教育に新たな地平を開いた。このことは、児童生徒の健康教育に寄与する内容であり、博士(教育学)の学位を与えるに値する。